

2021年 真宗本廟 「春の法要」にあたって

# ともに篤く 三宝を敬わん

宗務総長 但馬 弘



桜の花が香しい季節を迎えるも、新型コロナウイルス感染症に晒され続ける中、本年も真宗本廟「春の法要」に会わせていただきます。

同時に、二〇二三年の春にお迎えする「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」のおとずれを目の当たりに感ずる時節となりました。私にとっての立教開宗とは何であるのかを尋ね、本願念仏に生きる歩みを確かめる、大切な「時」と「場」を賜っていることを有難く感じております。

真宗本廟では、毎年四月一日に師徳奉讃法要及び親鸞聖人御誕生会を、十五日に立教開宗記念法要を厳修しています。聖徳太子・七高僧、そして本願念仏の教えを伝承してくださった諸師の遺徳を偲びつつ、親鸞聖人御誕生と立教開宗の恩徳を奉讃する御仏事をいたしております。

あわせて、本年は、慶讃法要に向けた「真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七十五周年記念大会」を開催いたします。慶讃テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」のもと、仏恩・師徳を報謝し、私たちに届けられている本願を聞信し、いよいよ慶讃法要に向けた歩みを相共に進めて参りたいと念願するものであります。

なお、本年一月に十一の都府県に対して緊急事態宣言が発出されたことに鑑み、法要及び大会のインターネット配信を主とする開催形態に変更をさせていただきました。是非ともご視聴いただき、ご参加くださいますようお願い申し上げます。また本年は、親鸞聖人ご自身が、敬愛と感謝の念をもって「和国の教主」と仰がれた、聖徳太子の千四百回御忌法要を厳修させていただくご縁をたまりませんでした。聖徳太子と親鸞聖人、生きられた時代は違えども、時代の大きな変革期に直面し、世間と人間の真実ならざる有り様を深慮され日本の仏教史上の曙光となられた、お二方であります。

聖徳太子は、人間の有り様を「忿（しん）のいかりを絶ち 瞋（おもしろい）のいかりを棄てて、人の違うことを怒らざれ。人皆心有り。心おのおの執（と）れること有り」〔十七条憲法〕第十条「真宗聖典」九六五頁）と著され、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」〔十七条憲法〕第二条「真宗聖典」九六三頁）とし、人間が救い摂られていく確かな道を「世間虚仮 唯仏是真」とお示しくございました。

親鸞聖人もまた、「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと」〔一念多念文意〕『真宗聖典』五四五頁、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」〔歎異抄〕『真宗聖典』六四〇頁）とお示しく下さっております。

お二方の言葉はともに、五濁悪世と、一人ひとりに横たわる無明煩惱の事実と、そして、現今の新型コロナウイルス感染症に苛まれる中で感い苦しむ私たちへ、真実の法である念仏の大道を教示くださっております。

このように、仏法を弘宣し、私たちをたえず護持養育してくださいました聖徳太子を和国の教主と仰ぎ、本願念仏の大道を開顕してくださいました親鸞聖人を祖師といたたく真宗門徒である私どもが、ともにお二方と出遇い直し、慶び讃える機縁となることを切に念ずるものです。